

「十二の籠に溢れる恵み」

ヨハネによる福音書 六章一〜十五節

「ヨハネによる福音書」を新しい仕方です御一緒に学び始めて、今日で最初の月の第三週目になりました。初めてのやり方ですので少しばかりとまどっておられるかもしれませんが、それでも、回を重ねるにしたがって少しずつお慣れになるものと思います。初めにお話ししましたように、ここでの学びは「ゆつくりと丁寧に、超スローでコツコツ」というのがキャッチフレーズですので、なしら慌てずに、よく噛み締めながら 聖書の語りかけに耳を澄ませていきたいと願っています。そんなふうにして、ゆくゆくは私たちの誰もが「いつも人に教えてもらって」ではなくて、「自分の目と心で積極的に」聖書を読み進めていけるようになればと思っっているわけです。そうやって聖書を読むことが楽しくなったら、本当にいいでしょうね。ということ、今週はいよいよ初めて、この私が聴き取ったメッセージを御紹介することになります。タイトルをつけるとすれば、「わたしの心に響いたメッセージ」とでもなるでしょうか。

* * *

さて、前置きはそのくらいにして、本題の聖書に入ることしましょう。今月の出来事は一節にあるように、「ガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸」で起こりました。「ガリラヤ湖」とは、先週地図で見たとおり、パレスティナの北部の、その名も同じ「ガリラヤ地方」に位置する湖です。イエス・キリストは住民登録の旅の途中、南部のユダヤ地方のベツレヘムでお生まれになりましたが、お育ちになったのはガリラヤ地方のナザレで、その意味で、ガリラヤ湖は故郷の湖でした。「ティベリアス湖」ともう一つ名前を重ねているのは、「ヨハネによる福音書」が執筆された当時、ガリラヤ湖はこの名によっても呼ばれていたからです。湖の西のほりにある「ティベリアス」という町の名に因んだ呼び名です。ティベリアスは、ヘロデ・アンティパスというガリラヤ地方の王が当時ユダヤを支配していたティベリウスというローマの皇帝に捧げて造った町でした。こうしたことから、政治的な意味合いもあって、公式の名としては「ティベリアス湖」のほうが用いられていたのかもしれない。

事は、又の名をティベリアス湖といった、このガリラヤ湖のほとりで起こりました。今月の出来事は「パンと魚の奇跡」とも「五千人の給食」とも呼ばれますが、いわゆる奇跡物語としては「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」の四つの福音書のすべてに記されているただ一つのもので、この

点からも、出来事の重要性が窺うかがわれます。

他の福音書をあわせ読むと、時は夕方近く。「イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこに座りになった」と、三節は記しています。ここでいう「山」とは小高い丘ほどのものですが、そこに五節「大勢の群衆が」やつてきます。時間も時間です。イエス・キリストは人々の食べ物に心を配られます。「人はパンだけで生きるものではない」（ルカ四・四）。しかし、人はパンなしでは生きられないのも事実です。「我らの日用の糧かてを今日も与えたまえ」（マタイ六・十一、ルカ十一・三）と祈るように「主の祈り」で教えられた主イエスは、私たちのパンの必要にも心をくだいてくださいます。そこで、イエス・キリストはフィリポに言われます。五節「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」。フィリポはガリラヤ湖畔の町ベトサイダの出身で、一帯の地理や市場いちばなどに通じていたからでしょう。とはいえ、相手は大群衆です。フィリポは答えます。七節「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」。当時、一日の平均賃金が一デナリオンでした。ということは、二百デナリオンで二百日分の賃金になります。ユダヤでは安息日あんそくびには働かないので、週六日の労働として、およそ三十三週約八カ月分の賃金に相当します。大変な金額です。要するに、フィリポは「そんなこと、無理ですよ」と、そう言ったのでした。当然といえば当然です。

とそこに、もう一人の弟子のアンデレが言葉をはさみます。九節「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます」。当時の「パン」は、現在で言えばビスケットやスコーンのようなものでした。また、ここでの「魚」とは、鯛いわしほどの小さな魚を塩漬けにしたものと言われています。ガリラヤ湖は小魚の豊富な湖として知られる一方、保存のために通常、塩漬けにされていたからです。五つのパンと二匹の魚は、少年のお弁当だったのでしょう。アンデレも、それでどうなると思ったわけではありません。九節で続けて、「けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」と言っています。しかし、何なともあれ、アンデレは少年を主イエスに紹介しました。言い方は好きではありませんが、アンデレは言ってみれば「マイナー」な弟子と言えるでしょう。いつも「シモン・ペトロの兄弟」と、ペトロの付属品のようにして紹介されています。そして、いつも舞台の袖そでにいて、目立たない脇役を演じるのです。今月の箇所も同じです。八節で「シモン・ペトロの兄弟」と紹介され、少年をイエス・キリストに紹介するだけの、ただそれだけのいわゆる「チョイ役」でしか登場しません。しかし、ここでもまた、そんなアンデレの取り次ぎを通して、事が起こされます。十一節「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた」。する

と、十二節「人々〔は〕・・・満腹した」というのです。「その数は〔男だけで〕およそ五千人であった」と、十節は記しています。これは女性や子供を数えない、ある種男性中心の当時のユダヤ社会の習慣によるもので、全体ではこれよりはるかに多かつたこととなります。こうして、「五千人の給食」の記事は十三節、残ったパンの屑を集めると「十二の籠がいっぱいになった」と記して終わります。これが、「パンと魚の奇跡」のあらましです。

私たちははたして、ここから何を聴き取り、何を学ぶようにとこの出来事を与えられているのでしょうか。表面的なことやおまけのあれこれではなく、事柄の本質や信仰の本質に関わることとしてこの身に何を受けるようにと御言葉を与えられているのでしょうか。

実は、今月のような奇跡物語などと関連して、私がいささか辟易へきえきしていることが一つあります。それは、物質的な見える祝福や見える恵みばかりを声高に唱える人たちがいることです。以前、ある教会のゴスペルの集會に出席したときのことです。日本在住の黒人のクリスチャングループで、リズムに乗って体をスイングさせながら歌うゴスペルはさすがに日本人のそれとは違って、素晴らしくて感動的なものでした。心を揺さぶられるそんな音楽の後、しかし、アメリカ人であるそのメンバーの証しを聞いた私の内に何とも言いがたい違和感が残りました。それは、こんな証しでした。「私たちはイエス様を信じています。そのおかげで、アフリカなどでは食べる物もない人々がいるのに、主の恵みによって、食べるにこと欠かない豊かな生活を与えられています。感謝です」。恵みの証しは一貫して、そうした生活の豊かさや健康の祝福ばかりでした。つまり、物的な、また肉体的な見える祝福や見える恵みに終始していたのです。一言で言えば、「見えるかたちで物が満たされる」ことです。もちろん、食べる物が与えられ、健康が支えられ、生活が保証されることは悪いことではありません。実際、この私にも今、病が回復され、生活が支えられるようにと祈りに憶えている人たちがいます。必要な物が与えられ、健康が回復されること。それは私たち誰しもの祈りであり、それらが与えられることは言うまでもなく、感謝なことです。私が感じた違和感とはそうではなく、そうしたものばかりを神様からの祝福、神様からの恵みとして並べ立てることにありました。

私はどうしてもこう感じざるをえません。「ならば、アフリカで餓死して死んでいつているクリスチャンたちは信仰が足りないのだろうか。神の恵みの外に放り出されてしまったのだろうか。エイズで死んでいつているアジアの貧しい子供たちは神から見捨てられてしまったのか」。国内に目を転じて、同様です。来る日も来る日も汗と泥にまみれて働きながら、しかし依

然として底辺の生活しか営めない人たちは神の恵みと無縁のところへ捨て置かれてしまったのでしょうか。東日本の大震災と原子力発電所の災害に今なお苦しんでいる方たちも、そうです。私はむしろ豊かに与えられていながら、自分たちのエゴのために必要な物を分かち合わない政治の罪をこそ、ここに見る思いがします。表面きれいな顔をしながら、裏で買春に遊びほうけている日本を含めた先進諸国の人々の罪をこそ、そこに見るように思うのです。私がそこに見るのはこの私をも含めた人間の罪の根深さであり、その姿を悲しまう神様の涙です。

その意味で、ただ単に物や出世や肉体が富めることではなくて、神の御心に生きることこそ喜びを憶え、貧しく厳しいなかにもそうしていった人たちの内に、私はもつと深い祝福と恵みを見る思いがしています。物的な面では決して豊かとは言えない。けれども、そんななかでもなお感謝をしながら、心満たされつつ、神様の思いを自分の思いとしていった信仰者たちです。私はそこに、もつと本質的な祝福と恵みとを見るように思います。

いつか丁寧に御紹介できたらと思います。あの「田中正造」もその一人でした。栃木県の足尾銅山で鉱毒事件が起きたとき、その身を献げて人々の救済に奔走した人です。日本の公害運動の原点とも言われる事件ですが、正造は最後には行き倒れのようになって、知人の家で静かに召されていきます。しかし、その枕元には確かに、新約聖書が置かれていました。遺品らしい遺品をほとんど持たなかった正造が何よりも大切にしていたものでした。田中正造はそのようにして、物や名声に富むのではなく、神の御心に豊かになろうとしたのでした。また、死にゆく人々に神の愛をもつて最後の最後まで寄り添い続けた、あの「マザー・テレサ」。彼女もまた、そのようにして神様の御心分かたつことのなかにこそ真実の祝福と恵みがあることを知っていたのではないのでしょうか。どちらもイエス・キリストに倣ってその十字架を負いつつ、神の伴いに心満たされて、感謝のうちに人生を全うした生涯でした。こうした生涯のうちに本当の意味で主イエスの恵みの深さを見るのは、はたしてこの私だけでしょうか。世間が求めると同じ物的な見えるものばかりに神様の恵みを探すことのないよう、いつも心していたいと思っています。

いわゆる奇跡物語の読み方も、同じです。奇跡は私たちを感嘆させ、神の力に目を開かせます。奇跡に示される神の力。それもたしかに、神様の一面を物語るものかもしれませんが。しかし、それが何のためのもので、そこで何が語られているのか。裏に置かれたそうした意図と本質的なメッセージを置き去りにして、「同じ奇跡をこの自分にも・・・」と自分のための見えるものばかりに心を奪われると、そこに盛られている信仰の真理を見失うことにもなりかねません。

実際、今月の聖書も記しています。二節「大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちにな

さったしるしを見たからである」。十四節、十五節「そこで、人々はイエスのなきったしるしを見て、『まさにこの人こそ、世に来られる預言者である』と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行くとうとしているのを知り、ひとりでもまた山に退かれた」。『世に来られる預言者』とは、旧約聖書のモーセのような預言者を意味しています。人々は、病人を癒やされたイエス・キリストの奇跡を目の当たりにしました。その「しるし」を見て、人々は群れをなして主イエスの後を追い、「五つのパンと二匹の魚の奇跡」を再び目にします。人々の興奮は今や、留まるところを知りません。「この人なら、ローマ帝国の圧制から我々を解放し、富と栄光の国を再興してくれる」。そのような期待して、イエス・キリストを「この世の王」に祭り上げようとしています。しかしながら、これに対して主イエスは「山に退かれた」と、福音書は記すのです。聖書を書き写した写本の中には、「退かれた」を「逃げた」と記しているものもあります。つまり、人々の願いや期待に絡め取られないよう、その場を逃れたというのです。イエス・キリストは人々の願望を退け、神との交わりを求めて、静かな山に身を隠された。なぜでしょうか。それは、主イエスの教えられる神の国は、目に見える物や成功や栄光を追い求めるこの世の王国とは異なるからです。自分の願いを押し付け、その願いを叶えてくれる神を設える。私たちはいつも、そうした誘惑に敏感でなければならぬのではないのでしょうか。神を私たちの心に仕えさせるのではなくて、この私を神様の御心に仕えさせる。それが聖書の求める信仰だからです。「五千人の給食」の奇跡もこの信仰の中で読み、そこで告げられているメッセージもこの信仰において聴き取らなければならない。それはとりもなおさず、見える奇跡の内に見えない事柄を見て取り、見えない信仰や魂のことを聴き取ることだろうと思います。そしてそこで、何より深い恵みに目を開かれ、その恵みを感謝して受けることではないでしょうか。

では、今月の奇跡「五千人の給食」の核心はどこにあるのでしょうか。それは、この私たちすべてのために、イエス・キリストの下さる「真のいのち」が用意されてあるということではないでしょうか。それを、私たちが受け取るか否か。私たちの側のその問題についてはむしろ、少し後の三十四節以下での絞って詳しく述べられますが、今月の箇所ではその大前提として、神様の側のこととしてはそれをすでに備えて用意してくださっているんだという、その恵みの事実を告げているという事です。

そもそも、「ヨハネによる福音書」は全体を通じて三度、「過越祭」というお祭りに言及しています。「過越祭」というのは、ここでは細かな説明は省きますが、ユダヤの三大祭りの一つです。その

過越祭に、「ヨハネの福音書」は全体で三度、触れている。第一は二章の十三節で、主イエスがエルサレムの神殿で「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と言われたところです。御自身の十字架の死と復活を意味されたものでした。第二は今月の四節。そして最後は十九章の十四節で、ローマの総督のピラトによつて、イエス・キリストが十字架の刑に渡されるところです。そのようななか、今月の「パンと魚の奇跡」もまた、次のような主イエスの言葉に繋がられています。「私は命のパンである。私の肉を食べ、私の血を飲む者は眞実生きる」。湖の上での出来事を挟んで記されている二十二節以下五十九節までの要約です。つまり、要するにどうということかという点、こういうことです。すなわち、「ヨハネによる福音書」が過越祭に言及するとき、それはいつもイエス・キリストの死と復活について語るときだということ。しかも、そのようにして、復活された主イエスを自分自身の内に迎え入れ、そのいのちにあずかるようにと招いているときだということなのです。

これらからも分かるように、イエス・キリストが人々に分け与えられた五つのパンと二匹の魚、それは十字架の上に献げられた御自身の体を意味しています。主イエスは十字架の上で御自分の体を裂かれました。それは、御自身を私たちのために献げ切られたお姿でした。そのようにして、私たちに本当の生き方というものを示してください。私たちがその眞実に心を向け、御自分に倣つて、御自分と一緒に歩いて生きることを願われたからです。なぜならば、そのような生き方の内にこそ、人を眞実生かし、この私たちを本当に豊かにするいのちがあるからです。イエス・キリストは御自分を食べ物に喩えて、そのいのちを十字架の上から私たちに分かとうとしてくださったのでした。

食べ物というのは、どこでもよく見られるように、ユダヤでも昔から祝福と恵みを象徴するものでした。イエス・キリストが神の下さったその食べ物であると、聖書はそう知らせるのです。その食べ物、祝福として、また恵みとして、この私たちすべてのためにすでに用意されている。それが、「五つのパンと二匹の魚」の意味するところではないでしょうか。ですから、私たちはここでも「しるし」というものを正しく理解して、十字架の上に死んで復活されたその主イエスというお方をそれぞれの内に頂きたい。私たちの内に迎え入れたい。繰り返し内に迎え入れ、そのいのちを味わつて、そのいのちに生かされていきたいと、そう願います。それは私たちの心の奥底をその最も深いところで豊かに満たし、渴きを癒やしてくれます。そうしたことを大事に考えずに、自分自身をいのちの干からびた死んだものとしたくはないと思います。神様の御前に立つそのとき、「これでよかった」と納得して言える日々をおくりたいと思っています。

しかも、今月の聖書から聴こえてくるメッセージはただこれだけでなく、まだ聴こえてくるように思われます。今月の出来事には、これと同時にあと一つ、見過ごしてならないことがあるように思うのです。それは五つのパンと二匹の魚を差し出した少年がいたということであり、その少年をイエス・キリストに取り次いだアンデレがいたという事実です。

少年は「大麦のパン五つと魚二匹とを持っていた」といいます。大麦のパンは当時、貧しい者たちのパンでした。小麦粉が買えなかったため、家畜の餌えさだった大麦でパンを作ったのです。ですから、少年は貧しい家の者だったのでしょう。事実、この少年は単なる少年ではなく、少年奴隷だったとする説もあります。御主人のお供をして、一緒に来ていたというわけです。とすれば、イエス・キリストは最も小さな存在の少年奴隷から最も貧しい食べ物を受け取られ、それで男だけでも五千人に及ぶ人たちを養われたことになります。しかも、少年を主イエスに取り次いだアンデレとて、確かな信仰があつてのことではなかった。「けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」と言いながら取り次いだのでした。これはいつたい、何を物語っているのでしょうか。この出来事の奥に何を見て取るようにと、私たちは期待されているのでしょうか。それは、この私たちがどれほど貧しく、その信仰がどれほど小さくとも、何はともあれ、それをイエス・キリストに差し出すとき、主イエスはそれを受け入れ、御自身の働きのためにそれを大きく用いてくださる。そして、私たちを神様の祝福と恵みの取り次ぎ役としてくださる、ということではないでしょうか。

犬養道子いぬかいみちこというカトリックのクリスチャンがおられます。御存じの方も多いかと思いますが、第二次大戦前の五・一五事件で暗殺された犬養毅首相の孫娘に当たられる方です。戦後、戦争犠牲者などの難民の救済を中心に、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどで長年にわたって精力的に活動してこられました。たくさんの本を書いておられますので、手元に入る印税もかなりの額にのぼるはずですが、それもほとんどをこのために捧げてこられました。ただ、もうだいぶ長い間、独りで暮らしておられ、しかもお年がお年ですので、最近はいぶ弱いぶじやくつてこられたのではないかと、少し気にかかっています。事は、忘れえぬ思い出として、この犬養さんが新聞に寄せられた御自身の証しです。それは、二十代でアメリカに留学しておられたことと、犬養さんは結核を病んで、ほぼ三年にわたって、カリフォルニアの療養所に入院されたといえます。その折のこととして、三十七年余りも前になりますが、毎日新聞に次のようなエッセーを寄せておられるのです。それは、療養中に巡り合った「J」という青年との感動的な出会いについてです。エッセーには、「めぐりあい―苦痛の限りを身に受け、なお・・・」と、タイトルが付けられています。けっこう長いものですので、抜粋をして御紹介させていただきます。

ある日、病棟づきの修道女がガリ版の小冊子をくれた。仲々いいと、彼女は言った。「い本」を数十冊も枕もとにつみ重ねていた私は、正直言ってそんな小冊子を手に取るつもりは毛頭なかったが、彼女の好意を無にしないためにだけページを開けた。そして、たちまち魅せられてしまった。Jの署名で巻頭にのせられていたのは、「驚き」というすばらしいものが・・・いかに当たりまえや自明と思いきまれているものごときに・・・突破口を開け、新しい価値に向けて心を開放するか、というテーマのエッセイで、己れの狭きを出ることの意義が、ユーモアに満ちたきれいな英文で綴られていた。私ははっとした。己れの苦悩にかけ切り、己れを「出ない」自分に気づかされた。見映えのしないガリ版刷りのことあたらしく読み通し、枕の下に大切にしまった。

・・・私は・・・「病床に見出す驚き」の題で小文を書き、ついでに自分の現状と悩みもちよっぴり記した手紙を彼に送った。・・・Jからはタイプで打った返信がすぐに来た。元気で明るくて、激励に満ちて、おしつけがましくなくて、適当におかし味もあって親切で——私はさっそうとしたアメリカ人を想像した。ひとつ気づいたのはしかし、文末の署名で、それはひどくふるえていたJの一字。高齢なのかしら、手を怪我しているのかしら。

月一回、ガリ版が送られて来るようになり、楽しみに何度も読みかえす発渌とした手紙も必ず中に入っていた。さみしい時や心の重い時、彼の手紙はいつも光と勇気と希望を私に与えつづけた。・・・「が、」クリスマスが近づくころ、手紙は短くなり、「みんなと一緒の祝いのために」忙しいと書かれていた。「東部の町に住む身にカリフォルニアは遠い。自分であなたを訪ねることができないから友人を訪ねてもらおう」とも。「友人」は年末に来た。司祭であった。Jのことを知っているか、と訊ねた。・・・司祭は「Jには内緒で」教えてくれた。Jが最も悪質なポリオに蝕まれた重症身障者で、口をのぞいては首も手足も動かさぬまま、二十数年を過ごした。しかも、身よりも金も全くない青年であることを。施設の大部屋の一隅に横たわり、しばしば襲う心臓発作の激痛に耐えていることを。孤独と病苦の人。私は仰天した。口がきけなかった。司祭はつづけた。ベルフという言葉を知っているか。「招かれた人、使命を生きる人という意味の言葉。Jはその人です。苦痛の限りを身に受けて尚、それを超え、それから出て行き、与えられた心と才を使いに使って、周囲に光をばらまく人」。光をばらまく手段が、あの小冊子であったのだ。・・・クリスマス前にJが忙しかかったのは、口にくわえたペンで、小冊子購読のすべての囚人たち——最もさみしい人々

——にカードを書くためであった。彼の署名がふるえているのは、ペンをくわえて書くからであった。

——手紙のやりとりは二年間つづいた。友情が育って行ったが、私は折にふれて彼の友情の中に、キリストを感じとった。音信が途端にとぎれたのはいつだったろう。そして数週のものち、私は黒枠の小さなイコン聖画のカードを受けとった。・・・召天したJのためになで選んだカード。・・・「けれども」涙をこぼしながら、ふしぎにも私は悲しまなかった。ただ、感謝をした。讃美をした。人間はここまで美しくなれるのだ、と。自分が病に倒れたことをも感謝した。倒れなかったら、Jに「めぐり会う」ことは出来なかったから。

ここにも、現代の少年奴隷がいます。現代のアンデレがいます。最も小さな存在の最も貧しい持ち物が、イエス・キリストにそれを差し出すとき、神の恵みを取り次ぐ器とされる。考えうるかぎりの最低のところからでも、自分を差し出すとき、神は私たちをその大きく豊かな祝福と恵みの取り次ぎ役としてくださる。神様はそのようにして、御自身の恵みを分け与え、満たされるのではないでしようか。

こういう言葉をお聞きになられたことはないでしようか。「私たちは互いのパンを共にするなら、それがごくわずかなものであっても満ち足りる。誰かが自分のパンを自分のためだけに取っておこうとするとき、そのときに初めて飢えが始まるのである。これは、神の不思議な掟おきてである」。第二次世界大戦の末期にあのヒトラーのもとで殉教の死を遂げたボンヘッファーというドイツの信者の言葉です。ここで言う「パン」とはいったい、何のことでしょうか。

それは、「自分自身」のことです。すなわち、私たちが自分のためだけにとっておこうとするとき、私たちの間から恵みが失われ始めます。私たちの世界に恵みが満ちないのは確かに、私たちが自分自身を独り占めにして、隣り人の前に自分を差し出さないからではないでしようか。それはつまりは、自分を神様の御心に差し出さないこと、神様の御前に差し出さないことと言えるでしょう。けれども、もしも私たちが自分自身を差し出すならば、それがたとえわずかなものであっても、残り十二の籠にいっぱいになるほどに祝福と恵みがそこに満ちると、聖書はそう告げているように思えます。

「残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」。それは、イエス・キリストの下さる恵みが溢れるほどに、それほどまでに豊かなことを表わしています。そしてまた、それほどに重いものであることをも示しています。イエス・キリストが御自分の体を裂いて分け与えられる恵みだからで

す。「十二の籠」とあるのを御覧になつて、お気づきになれないでしょうか。十二弟子の「十二」です。要するに、弟子それぞれに一つずつ籠があり、そのすべてがいっぱいにされたということです。弟子たちはズッシリと、その重さを感じ取ったことでしょうか。主イエスの慈しみの重さであり、犠牲の重さです。そして、それはとりもなおさず、自分たちに託された務めの重さでもありました。イエス・キリストの恵みを受け渡して分かち合う。大切な、そして豊かな務めの重さです。だからこそ、弟子たちはこう言われたのだろうと思います。十二節「少しも無駄にならないように」。六節に「こう言ったのはフィリポを試みるためであつて」とあつたのも、この重さを深く感じ取らせるためだつたのではないのでしょうか。「こんなに大勢では、全員に行き渡らせるなど、できない」。そう感じて、お手上げ状態にあつたフィリポは、しかし、気づくと籠いっぱいのパン屑を抱えていました。ズッシリと、その重さを実感したにちがいありません。ほかの弟子たちも同じだつたことでしょう。イエス・キリストの恵みによつて、籠がいっぱいにされたのでした。

正直なところ、私たちはあまり信じていないのかもしれませんが、だから、さして期待もしていない。「そんなことしたつて、どうせ・・・」と、聖書のフィリポやアンデレのように初めっからしにかけているのかもしれませんが。犬養さんも、御自分の小ささを教えられたと振り返っています。「こんな、何にもできない人がまさか・・・」。思つてもみなかつた」と。私たちはもう少し、信仰に期待してもいいのではないのでしょうか。いや、私たちの信仰ではなく、キリストに信頼してもいいのではないか。この私たちが決めてかかっているところを裏切つて、この私たちのしらけを覆くつがえして良きことを起こしてくださるかもしれません。人が関わることを通して、とりわけこの私が関かわることを通してそうしてくださるのではないか。そう思わされています。

たとえばずかであつても、主イエスに触れた者は、誰もが神の恵みを分かち合う務めに招かれているのではないのでしょうか。自分を差し出して分かち合う務めです。そして、こう問いかけてもいるように思います。イエス・キリストの恵みが少しも無駄にならないように、十二の籠に集めて、それを大切にしているか。恵みを恵みとして感じることなく、当たり前のこととして軽く扱つてはいないか、と。イエス・キリストは、この私たちのために、十字架の上で御自身の体を裂いてくださいました。「パンと魚の奇跡」は、このイエス・キリストが中心におられます。その主イエスに、まずもつて、心からの感謝を捧げたい。感謝の祈りを捧げながら、その実「もう一度、欲しいものを！」と裏でせびるような打算的な感謝ではなく、ただただ感謝をする、そのような心からの感謝を捧げたと思います。そのようにして感謝をしつつ、たとえ貧しく小さな自分であつても、何はともあれそ

の自分をイエス・キリストに差し出していくとき、私たちは少しずつ主イエスのいのちで満たされていくのではないだろうか。しかも、それだけでなく、そのいのちを受け渡して分かち合う者ときられていくにちがいありません。

いずこに行こうとも、あなたの香りを放つことができますように。

・・・「わたし」という人間そのものによって、

あなたを伝えることができますように。

わたしの行ないがそれをなし、

わたしの行ないが起こす共感がそれをなし、

わたしの心に満ち溢れる。あなたへの愛がそれをなしますように。

ニューマンというイギリスの司祭が詠んだ「キリストの香り」という詩です。

いずこに行こうとも、あなたの香りを放つことができますように。

・・・「わたし」という人間そのものによって、

あなたを伝えることができますように。

わたしの行ないがそれをなし、

わたしの行ないが起こす共感がそれをなし、

わたしの心に満ち溢れる。あなたへの愛がそれをなしますように。

お祈りをいたします。

〔祈り〕

愛する神様。

私たちを真のいのちに生かすため、いのちのパンとして十字架上で御自身を裂かれた御子イエス・キリストを感謝いたします。

どうか、あなたの恵みの内に私たちを捉え、生かしてください。しるしを見抜く目を私たちに与えてください。小さく貧しく取るに足らない私たちですが、あなたの御手みてによって養い、御業みわざに仕える器としてくださいますように。

このとき、なおも独り心細さのなかにある方々の上に、あなたが御子の姿をもって臨んでくださいますように。その方々の前にもあなたがキリストの御姿みすがたをもって御自身を差し出しておられること

に気づかせてください。苦悩の中にある方々の上に臨んでください。その内をいのちのパンで満たしてくださいように。この私たちを、そのために自分を差し出して関わる者としてください。

そして、何よりもまず、いつの時も・どこにあっても 御子イエス・キリストの言葉をもって私たちに近く親しく伴い立ってくださいますように。

そのことを信じ感謝して、主イエスの御名みなによってこの祈りをお祈りいたします。

アーメン